

# 近世・近代における災害観と浅間山イメージ

A View of Disasters and Image of Mt.Asama from Early Modern to Modern age

玉井建也\*・馬場章\*

Tatsuya Tamai, Akira Baba

## 1. はじめに

歴史学研究において現在の社会情勢を反映してか、環境や災害を対象にした研究が散見されるようになってきた。災害という非日常的な様相の中で当該期の社会状況がどのようなものであったのかという問い掛けは、1995年の阪神淡路大震災の直後に開かれた江戸遺跡研究会のシンポジウム「災害と江戸時代」が「一種異常な雰囲気の中かで進行した」<sup>(1)</sup>ということからも、現在と過去の非連続性を認識しつつも、ある種の連続性の中に位置付けようという意識が働いているのかもしれない。このような状況下で、我々が災害を研究する意義はその社会的要求とともに高まっていることを見失ってはいけない。

近世から近代にかけては、様々な災害が日本列島およびその近隣にて起こり、そして伝えられている。その中でも特に近世において最大の噴火ともいえる天明3(1783)年の浅間山の

噴火(浅間焼け)の存在を指摘することが出来よう。従来の研究では特に理系や考古学研究による自然環境復元を目的とした研究が多くみられたが、災害史という大枠の中の一つとして取り上げた北原糸子氏の研究が当該期の社会的背景を探った大きな研究といえよう<sup>(2)</sup>。北原氏は文献史料や絵図史料などを複合的に捉え、特に災害に関する情報論として研究を重ねている。また、渡辺尚志氏は文献史料から、天明の浅間焼けの実態を分析している<sup>(3)</sup>。大浦瑞代氏は北原氏が研究の端緒をつけた絵図史料を、さらに詳細に分析を重ね、また、災害記憶として石碑などを取り上げている<sup>(4)</sup>。このような研究史の中で、天明の浅間焼けに関しては文献史料からその実態的な側面は既に明らかにされている。しかし、天明の浅間焼けをどのように人々が捉え、そしてどのように伝えていったのかといった点は大浦氏が石碑で指摘したのみに留まって

\*東京大学大学院情報学環

キーワード：災害観、浅間山、近代登山、地域社会、日本史

いる。したがって本稿では浅間山をめぐる様々なイメージを近世から近代という枠組みの中で

捉えていくことにする。

## 2. 天明の浅間焼けという事象の認識・把握、そしてイメージ

まずは当該期の人びとが浅間焼けに対してどのようなイメージを抱いていたのかを探る前に、どのようにして浅間焼けが起きたことを認識したのかといった点を考察していく。従来の研究で指摘されているように、藩役人の記録から村落の記録などに至るまで数多くの記録類が残っており、さらには「大変記本」と呼ばれるように浅間焼けに関する筆写が数多くなされた<sup>(5)</sup>。災害という非日常的事象を把握するために、正確性を追求することは必然であったといえよう。当時、幕府の勘定吟味役として浅間焼けの被害状況を調査し、「浅間山焼に付見分覚書」<sup>(6)</sup>を記した根岸九郎左衛門鎮衛などはその一例である。また、京都町奉行の目付であった神沢杜口の「翁草」<sup>(7)</sup>をみると「其頃絵図書付あまた流布せしが、山川村里の名多端にして、伝写魚魯の謬り少なからず」と書かれているように、浅間焼けに関する様々な記録類が出回ったが、「山川村里」といった地名や村名などに間違いがあったことが指摘されている。そして「翁草」では高崎の女性の記録として羽鳥一紅の「文月浅間記」の写しが記録されている。これは誤謬ある記録類の中で、ある程度は正確に記録されている羽鳥の記録が推奨されたと考えられ、正確な記録というものへの追及と見て取れる。では、このような状況を踏まえつつ、当時の記録類から浅間焼けをどのように認識し、把握しようとしていたのかをみていく。

天明3年の6月下旬以降、断続的な浅間山の噴火が続き、7月6日から8日にかけて大爆発が起こった。この爆発をどのように人々は把握していったのであろうか。江戸の戯作者である山東京伝は「宝永四年不二山焼けたる時江戸に灰ふりしことあり、昨日鳴動したるは西北の方なり、此方に当たりて江戸近き高山は浅間なり」と宝永の富士山噴火と比較しながら、今回の噴火を浅間山だと推定したが、「人はしかりとも思わず」と他の人に理解してもらえなかったことを記している<sup>(8)</sup>。このように既存の経験値から語っていくことは多くみられ、志賀紀豊「後見草付録」<sup>(9)</sup>では教養的な内容ながら天明2(1782)年の浅間山の小噴火に対し、「富士山の焼けし時も斯の如く鳴しと云へり」と富士山噴火と比較し、危機を唱えた老人の存在を指摘している。これに対し老人は危険を感知し移住したが、「土民多く疑ひ信ぜず」と人々はこの老人の発言を疑い信じなかったとしている。このようにすぐに噴火を浅間山と結び付けることが出来なかったようで、蘭学医である杉田玄白の「後見草」では「人々の申せしは、過し比薩摩の国桜島の焼ける日、空曇り灰降りぬ、是は夫より多ければ遠国にてはあらし、近きあたり日光か筑波の山にて有るへしと口々にいへ触たり」と安永の桜島噴火と比較した上で、人々は日光か筑波山あたりの噴火と推測している<sup>(10)</sup>。

同様に「翁草」においても「延宝・天和のころにや、年暦は駈と不考、かゝる事有て江都迄も砂灰を吹飛ばしぬる」と江戸に火山灰が降ったことを過去と比較しているが、「其後百余年は此例を聞かず」と結論付けている。このように地理的感覚から、また江戸という都市の経験から、人々は火山灰のそして噴火の要因を把握しようとした。では、そもそも江戸の人々は何のようにして噴火そのものを認識したのか。

前述の杉田玄白の「後見草」をみていくと「庭の面を相見れば、吹来る風に誘はれて細き灰を降せたり」と庭に灰が降ってきた後、「手に取て能見れば灰にはあらで焼砂なり」と手に取ってみたところそれを火山灰であったと認識している。また、加藤景範「浅間岳炎上記」<sup>(11)</sup>では、火山灰の降下だけではなく、「怪しうなるのふるが風かときけば草木もそよがず水もさわがず、たゞ戸障子のみ、がた／＼となる」と地震か風かと思うも草木が揺れず、障子だけが鳴るという現象をまず捉えている。これは江戸ではなく京都の医者である橋南谿も同様の状況であったようで、「北窓瑣談」<sup>(12)</sup>では「我家の戸障子なども鳴はためきぬ。東山の鳴動するなど人々驚きありぬれどさる事有まじ」と家の戸障子が揺れたことで、人々は東山が噴火したかと驚いていたが、そうではないと橋は判断している。この後、浅間山が噴火したことを知るわけだが、橋の浅間山噴火という推測が合致していたのは「薩摩の桜島燃し時程遠き国は何となく地震のやうに障子など鳴はためきけると兼て人の詞に聞つたへみればなり」と過去の桜島噴火にても地震と同じように障子が鳴り揺れたと聞いていたからだとしている。

このように浅間焼けをまず第一に認識するのは、庭先に火山灰が降ってくることや、自らの住まいの戸障子が鳴り揺れるなど、プライベートスペースへの侵食が大きな要因として指摘できる。特に戸障子や家屋の庭先といった、ある意味でパブリックな空間とプライベートな空間の境界線上の侵食行為であり、それを執筆者自身が認識する身体感覚の延長線上の中で把握していることが分かる。浅間焼けといった大きな自然現象の把握は、このような随筆執筆者自身の感覚把握から行われている。ただし、浅間山からある程度の距離がある江戸や京都であるがゆえの記述であることも考慮しなければならない。では、浅間焼けが起こった後には、どのようなイメージが構成されていったのであろうか。

天保2(1831)年に山田桂翁によって書かれた「宝暦現来集」<sup>(13)</sup>をみると「南の方角の老農の云く、山上の光り物東の空へ飛たりと云へり」と書かれている。後の記録であるが「老農」の証言として天明の浅間焼けが起こる際、「光り物」が浅間山から東の空へと飛んでいったとされる。杉田玄白の「後見草」では「如何なる水筋へ如何なる毒の流れ入るらん」と書かれ、浅間焼け以降に川に毒が盛られたという流言があったことを示唆している。このような言説は他にもみられ、「天明三年癸卯秋七月上旬信州浅間焼之図」<sup>(14)</sup>には「川魚大小となく皆浮流る、是を取て食するものも不残其毒ニあたりて服痛吐瀉す、半死半生のもの多し」と書かれている。浅間焼け以降に川魚が浮き上がり、それを食した者が腹痛などを起こしたことが記されている。

さらには「浅間ヶ嶽振動実記」<sup>(15)</sup>をみると「信州浅間山の近所、白井峠の中辺」から

「獣」が登場したと書かれている。「世上の田畑をあらし、雷を起し、雨をふらす」と活動し、体は赤米や鳴門きんととき、銭などで構成されており、当時の飢饉や物価高騰などを風刺した内容となっている。

このように浅間山や浅間焼けに対するイメー

### 3. 近世における災害観と浅間焼け

前述のように随筆史料から、人々は過去のそして各地の火山噴火と比較しながら、浅間焼けを把握しようとし、また噴火直後も火山灰降下や戸障子の揺れなどを身体的に経験することで認識を強めていくことになったことがわかった。さらには、浅間山・浅間焼けそのものというよりは火山噴火で起こった様々な出来事から非日常的イメージが構築されていることがわかった。では、そのような状況を踏まえて、江戸時代の人々の災害観、そして浅間焼けへのイメージ像はどのようなものであったのかを、随筆史料以外から探っていく。

江戸時代において相撲の番付をモチーフにして、様々なものを番付で表現する見立番付が作成された。見立番付の中に災害を取り上げたものがあることは既に北原氏が指摘している<sup>(16)</sup>。では、その中で火山噴火はどのような位置付けをされているのか。まず一つ目が安政2(1855)年に発行された「慶長以来聖代要廻磐寿恵」<sup>(17)</sup>である。これは災害を取り上げたものであるが、「大火方」、「地震方」、「洪水部」、「津波部」と四つの分類がされており、火山噴火に関するトピックは取り上げられていない。火山噴火を取り上げたのは、同じく安政期に発行され

ジというよりは、浅間焼けによって起こった川魚の大量死や飢饉、物価高騰などを風刺したものである。つまり浅間山そのもの、もしくは浅間焼けそのものを異形なものとして処理するのではなく、火山噴火から派生した事象を異形なものとして捉えていることがわかる。

た「珍事一覧」である<sup>(18)</sup>。この史料の内容は大火・地震、さらには「アメリカ舶来」や「星落ル雨ノ如ク」というように時事から伝説に至るまで地域・時代を問わず記録されており、特徴的なのは江戸・関東一円・京都・大坂・長崎といった都市部の出来事を多く取り上げている点が指摘できよう。その中でも江戸に関しては「江戸青山出火」、「江戸高輪大火」というように江戸内部の町名レベルでの出来事が取り上げられている。また、火山噴火としては、天明の浅間山焼けと宝永の富士山噴火の二件のみが並んで取り上げられているが、決して上位ではない。何より史料名からもわかるように珍事として認識されている。しかし、例えば日本の山川を見立番付で表した「日本山川見立相撲」<sup>(19)</sup>をみると浅間山は山側の関脇に位置付けられており、決してその地位が低いわけではない。

以上のように、災害観という観点では、浅間焼けを災害というよりは珍事として捉える傾向がうかがえたが、浅間焼け自体に焦点を当てた場合、どのようなイメージを当該期の人々は抱いていたのであろうか。

天明の浅間焼けを描いた絵図は数多く存在

し、いくつかの傾向に分類することができる<sup>(20)</sup>。北原氏は天明の浅間焼けに関する災害絵図を、①諸藩によって実態を把握しようとしたもの、②村役人による記録、③個人の見聞記、④かわら版などの大量消費用の四つに分類をしている。また、大浦氏は製作者側から①噴火を描いたもの、②降灰被害を描いたもの、③泥流被害を描いたものの三つに分類している。福重旨乃氏は北原氏、大浦氏の研究を踏まえつつ、描かれている範囲・方角などを含めて分類を行っている。

このように様々な絵図が描かれている中で、当該期の社会性を帯び、人々の浅間山へのイメージを広く且つ直裁的に解読できるものとしてはかわら版を指摘できる。特に浅間焼けに関するかわら版の場合は「速報性かつ不特定多数の人に情報を伝達する媒体」<sup>(21)</sup>であるため、正確性よりも速報性に重きを置かれたがゆえに、浅間山をどのように伝えようと



図1 「浅間山噴火に関する瓦版」  
 東京大学地震研究所浅間火山  
 観測所所蔵

したか、どのような浅間山イメージを抱いていたのかという点が見える素材である。その天明の浅間焼けを描いたかわら版は三つ挙げることができる。一つは「泥流被害に関する瓦版」<sup>(22)</sup>であり、二つ目は「朝間山大やけの次第」<sup>(23)</sup>、三つ目は「浅間山噴火に関する瓦版」<sup>(24)</sup>である。このうち「泥流被害に関する瓦版」は浅間焼けを直接伝えるものではなく、浅間焼けによって引き起こされた泥流被害を取り扱ったものである。したがって、浅間山そのものは描かれておらず、絵図中には東西南北の文字が書かれ、それぞれに該当する地名が記載されているだけである。また、「朝間山大やけの次第」は「いまだ砂ふり、しんとうやまず」と砂が降り、振動が止まっていない状況が現在進行形で書かれていることから即時性を求めていることがわかる。したがって、描かれている絵としても噴火する浅間山とその近辺を描いている。

これら二つに対し、「浅間山噴火に関する瓦版」(図1)では違った様相が描かれている。既述の二つのかわら版では即時性が求められており、噴火の様相を伝えたり、泥流被害を知らせたりするものであった。しかし、「浅間山噴火に関する瓦版」では既にある程度の情報が蓄積された状態で発行がなされた。例えばかわら版左部には「浅間ヨリ上州辺三日三夜昼夜不分」と全体的な様子が記載されているが、それだけでなく中山道坂本宿の横には「一坪三石四斗フル」と具体的な数字が記載されている。これは坂本宿だけでなく、追分・碓氷・横川・藤岡・熊谷・鴻巣といった地名の近辺にも同様の数字が記載されている。ここからも分かるように、被害の様相を具体的な数字としてあらわすこと



が可能なだけの情報が蓄積されていることが分かる。しかし、ここで問題なのは決して情報としては正確に全てをカバーしているわけではないということである。中山道などの全ての宿における被害を記載しているわけではなく、またそれぞれの情報も各宿のすぐ横に書かれているわけではなく「此辺大石夥敷ふり」や「此辺二三尺フル」とあるように「此辺」とある程度の汎用性をもって記されている。ここからも決して正確性が追求されたことによる情報記載ではないということがわかる。

そしてこのかわら版のもう一つの特徴としては描かれている構図が挙げられる。噴火や泥流被害を直截的に伝えていた前2つのかわら版と違い、この「浅間山噴火に関する瓦版」ではある程度の情報蓄積に基づいた記載がなされており、速報性は薄らいでいる。したがって描かれる構図もまた変容しており、噴火する浅間山を上部に配置し、中山道と湯川周辺の宿・地名を

#### 4. 近代における浅間山登山の展開

前章のように随筆や絵図などから近世における天明の浅間焼けに対するイメージを分析した。では、近代に入ってそのようなイメージはどのような変容をみせたのだろうか。近代以降、浅間山および浅間山登山の実態を探りながら、イメージの解明を行う<sup>(25)</sup>。

鹿島神宮の宮司である鹿島則孝の『桜齋随筆』をみると浅間山周辺の様子に関して「不毛の広野数里に亘りて、只焼土に雑草を生ずるを見るのみ、一の大樹なくハ往昔噴火の最も甚たしかりしを想像する」と述べられている<sup>(26)</sup>。こ

記し、板橋そして江戸湾まで描いている。この中で特に特徴的なのは「江戸」までを範囲として描いている点である。前述のように江戸にまで及んだ被害としては火山灰が降ったということだけであり、直接的に大きな被害を受けたというわけではない。しかしながら、かわら版として速報性を求めている以上は、情報を即時に伝えるという以外の点に目的を依拠せざるを得ず、情報ソースとしてのリアリティを追求する必要がある。そのために前述のように正しいかどうかは別として具体的な数字を列挙し、また直接的な被害を受けていないにせよ、多数の読み手が存在する「江戸」を含めた絵を提示することによって、そのリアリティを保証しているといえる。

このように近世においては見立番付などをみると火山噴火を珍事として捉える傾向があったが、火山絵図、特にかわら版では人々の意識が強く反映されていることがわかる。

の記述は明治19 (1886) 年のもので、未だ雑草が生えるのみという浅間焼けの影響が残っている点がかがえることが指摘できるが、「往昔」を「想像する」とあるように何より遠い昔の出来事として振り返られる対象となっていることもうかがえる。このように浅間山の噴火ということに対して、浅間焼けから時間的な距離感が生まれたことは他の文章からも確認できる。

明治22 (1889) 年に内務省地理局によって発行された『官報抄覧』<sup>(27)</sup>をみると、「官報第一千五百十七号第九十九葉七月二十日」に

は「東京府下、二三ノ新聞紙」に浅間山が振動したと報道があり、長野県に問い合わせたところ「該山ハ振動セサル」という回答があったと記載されている。また同じ年の「官報第千六百四十二号第百八十五葉十二月十八日」では、「信州浅間嶽ノ噴煙ハ過日来、稍々其勢ヲ増シ、時々灰ヲ降ラシ、山中ニハ三寸余モ積リタル所アリ、追分・沓掛近傍ノ村落へも多少降灰アリシ由、新聞紙上ニ掲載アリシ」と同じように新聞での報道をもって浅間山の噴煙の情報を得ている。そしてこれに対し、地理局は「直ニ其四周ニ当レル長野県南北佐久、小県ノ三郡役所、並ニ群馬県碓氷郡役所ニ宛テ其實否ヲ照会セシ」と前回と同じ行動に移り、「皆右等ノ異変ナキ旨ヲ回答セリ」と同様に何事もないという回答を受け取っている。しかし、今回はさらに「長野測候所へモ照会」し、さらなる情報収集にあたった。そして長野測候所の回答は「元来浅間嶽ノ噴灰ハ時々コレアルコトニテ別ニ奇異トスルニ足ラス」と浅間山はたびたび火山灰を出し、別に珍しいことではないとし、「追分、軽井沢近傍ノ人民ハ降灰ヲ見テ別ニ驚愕憂慮スルノ状アルヲ聞カスト云フ」と追分や軽井沢近辺の人びとは浅間山の火山灰が降ってきてても特に驚いたり心配したりすることはないとしている。このように浅間山の噴火から多くの時間を経た明治期になると、浅間山の噴火ではなく降灰が起きたことが東京で発行される新聞で報道され、さらにはそれを受けて内務省自体が確認をするという事態になっている。そして地元との温度差からも、浅間山=火山という認識は立脚しつつも、その現実性を東京の人びとおよび内務省は認識していなかったことにな

る。これは浅間山の噴火から時間的距離感および地理的距離感の複合的作用といえる。

しかし、このような状況であったが、浅間山への距離感は時代とともに変化していく。特に鉄道の敷設のように交通網の変化、また軽井沢という場所の変容によって、浅間山への物理的・表象的アクセスも大きく変化していく。明治21(1888)年に軽井沢駅が設立され、さらに明治26(1893)年には東京から信越線が軽井沢に向けて直通になると、浅間山へ訪れる観光客が増える。

明治40(1907)年に発行された志村寛、前田次郎の『やま』<sup>(28)</sup>では各地の山が取り上げられており、その中で「浅間山」も着目されている。ここではまず東京から浅間山へ向かう道程が紀行文調で書かれており、碓氷峠を越える際には「自ら塵寰を脱して仙境に入るの思あり」とそれまでの関東平野とは違う様相が目の前に広がることで、認識としての境界線が引かれていることがわかる。その後、長野にたどり着いたときも「都門燦金の炎暑に苦しむ時、こゝに万古の涼風あり」と評しているように東京との差異の中で捉えていることがわかる。その後、浅間山登山へと移るわけだが、「信州方面より浅間に登るに四道あり」と四つのコースを挙げている。一つは御代田から尾道へ行き、そこから登るコース、二つ目は御代田から塩野を経て、そのまま頂上へ向かうコース、三つ目は小諸駅から登るコース、四つ目は軽井沢から沓掛駅に出て、小浅間の麓から登るコースが挙げられている。その中で、御代田から登り、小諸へと降りていくコースが最も楽としている。このコースに関しては明治35(1902)年に発行された

『名蹟巡錫記』<sup>(29)</sup>では、最も一般的なものとしては小諸町から東に向かって登るコース、沓掛から小浅間の麓に至り、そこから西に登るコース、追分から登るコース、御代田から北へ向かい登るコースの四つが挙げられている。このことからこの四つのコースが一般的に捉えられていたようである。では、実際の浅間山登山の様子はどのようなものであったのだろうか。

前掲の『やま』では、上野駅から半日かけて御代田にたどり着き、その日のうちに登山を行うのは無理なため、そのまま塩野へと行き、真楽寺に宿泊すべきであると述べている。この真楽寺は「浅間登山者の常に宿泊するところ」とされている。そして、『名蹟巡錫記』では、「我等一行の雇ひし案内者、名を原田彦市といふ」と書かれているように、登山道中の案内人を雇っていることがわかる。この案内人の存在に関しては他の記録にもうかがえる。明治39年に発行された拈華散人の紀行文集『山紫水明』<sup>(30)</sup>では、列車で碓氷から軽井沢へと至った著者が御代田から追分へと移動し、「草鞋、長杖、行厨、及び飲用水を携へ行かざるべからず」と基本的な装備を指示し、「地理に詳しくあらざれば索め得がたし案内者を僦ふ」べきであるとしている。

明治39年に書かれた、登山家であり作家である小島烏水の『山水無尽蔵』<sup>(31)</sup>には、浅間山の紀行文が収められているが、そこでは小島は横浜から列車を乗り継いで御代田へと至り、駅前の旅店に泊まっている。そして浅間登山をする前の晩に「女房を呼びて明朝浅間への案内を頼み」と宿屋のものに何かしらの案内を頼んでいる。これに対し翌朝になると宿屋の隠居が

挨拶にやってきて、「俸を嚮導させむといふ、私も取る年ぢやて、お山の見収めにお伴を願ひます」と案内者として宿屋の隠居とその俸が雇われ、同行することになった。このことについては同じ小島の明治40(1907)年に発表された『雲表』<sup>(32)</sup>をみると「我が浅間に登りたるは、今より十年前の晩秋(中略)御代田にて、汽車を下り、同車の人に教えられて、鉄道線路の踏切に近き狭苦しき旅籠屋に投じ、翌朝宿の隠居と、その孫なる壯人を雇ひて、登山を果たしぬ」と書かれているように、明治30(1897)年の出来事であったことがわかる。そして明治39年にも浅間山に登っており、今度は軽井沢駅近くの宿に泊まり、「翌日登山の導者と準備とを依頼して眠」り、翌日案内人と一緒に登山を行っている。十年という年月を経ているが、コースは違えど、案内の者を雇って、登山をしている様子は変わらない。

明治40年に発表された、新聞記者であり作家である遅塚麗水の『露分衣』<sup>(33)</sup>をみると、御代田へとたどり着いた著者は「主婦を喚びて浅間山に詣るの路を問ふ、主婦頬を皺めていふ、吾家に僕あり、毎に人の為に登山の東路をなす」とあるように旅館にいる案内人を紹介されることになる。明治42(1908)年に発表された、歌人であり随筆家である大町桂月の『関東の山水』<sup>(34)</sup>をみると、著者は軽井沢に宿を取り、そこから浅間山への登山を試みている。既に軽井沢は外国人の避暑地として栄えていたようで、そのことに関する言及がかなり多くを占めるが、浅間登山に関しては「明旦浅間山にのぼることを以てし、導者を雇はむことを囑しけるに、女、諾してくさ／＼の



ことをはなしけるついでに『西洋人は、夜よりのほりかけて朝早く山頂に日の出を見るものおほし』といふ」と宿の者に案内人を頼み、さらには避暑地としてやって来ている外国人の中には夜のうちに出発し、日の出を見ているものもいるという情報を得ている。これを受けて著者はすぐさま碁打ちをやめ、「時は九時なり。こゝより浅間山の頂まで六里の程なれば、今よりいでたつは早きにすぎむと思ひたれど、はや導者来れりといふに、さらばとて、旅館を出づ」とすぐさま出立している。ちなみにこの登

## 5. 整備される登山体制

既述のように明治期には登山客が軽井沢や御代田を訪れ、それを受けて、地元の宿泊施設では案内人を用意するなどの状況が確認できた。では、その後、どのように変化していったのであろうか。

大正4(1915)年に発行された『佐久鉄道案内』<sup>(35)</sup>には「近年登山客の爲め、その中腹に夏期郵便局の設置あり」と書かれているように、増大する浅間山登山客に呼応するように地域社会は変容していったことがわかる。また、前後するが、明治45(1912)年に、今も浅間山の麓にある「峰の茶屋」が設立された。これ以降、この場所を基点として浅間山登山が行われるようになる。長野県北佐久郡小諸町が大正13(1924)年に発行した「浅間山登山案内図」では「登山者の保護」という注意書きが記載されている。以下、その全文を掲載する。

山に関しては「小浅間のふもとにいたりしに、導者、路を失へり」と労力のかかる道のりであったようだ。

以上のように、浅間山登山の隆盛に関しては、紀行文をみる限りは東京などの関東方面から鉄道で直接、軽井沢や御代田にまで足を運ぶことが出来るようになったことが大きい。そしてそれらを受け入れる地元側としても、宿に頼むと浅間山登山の案内人がすぐさまやって来て対応できるように体制作りが出来ていたといえる。

小諸駅より浅間山頂上迄三里廿七丁、  
宿泊所 浅間館(一里卅一丁)浅岳ホテル(二里六丁)火山館(二里廿七丁)、  
草鞋二足を要す、糧食少くとも三食分及雲霧予防の爲め着莫蓆又防水マントの携帯を便とす、  
案内料は日中三円五十銭、夜間往復四円五十銭、乗馬往復七円なり。一丁毎に指導標識建設しあり。登山最好季六七八九十の五ヶ月間とす。登山するには噴火状態其他は小諸分署へ照会するを便とす。  
沓掛駅より二里卅五丁五十二間、単独登山を避け成可案内者を同伴するを可とす。食糧一日分及磁石の携帯を要す。濃霧及噴煙に異常あるとき又は鳴動するときは登山を中止為すと、登山口たる峯の茶屋に山の模様を照合するを便とす。登山道以外に踏入らざるは勿論噴火口附近は危険に付長く止まらざるを要す、岩石物件を火口に投入れざること沿道の樹木を毀損せざること。登山季は六七八九十の五ヶ月間とす、

面して駅に依託して登山者の注意事項を見易き所に掲示せり、

小諸口にては旅舎に諮り登山に関する注意事項を参考資料として配布せしめ登山に便ならしむ、近年噴火口に投身自殺を企つるもの漸く多からんとする傾向あるを以て之等に対しては特に観測所と連絡を執りて常に警戒しつゝあり、又噴火に対する危険に付ても観測所と連絡を執りて常に警戒しつゝあり、沓掛口にては峯の茶屋に登山者名簿を備へ置き登山者に自著せしむ、登山者にして服装携帯品等不十分と認むる者対しては注意を興へ天候険悪噴火模様ある時は登山中止を命すること、なし居れり、

この注意書きは、いくつかの点が特徴的であるといえる。まずルートが四つ挙げられていた明治期とは違い、浅間山の登山ルートが小諸からと沓掛からの二つのルートに絞られている点、さらにはその二つのルートにおいて宿泊所、峰の茶屋が登山客の管理を行っている点が指摘できる。特に小諸ルートの場合では宿泊所に登山に関する注意事項の資料を置いているだけだが、沓掛ルートでは登山客は峰の茶屋に置かれている名簿に記入する必要がある、これによって登山者の管理を行っていることがわかる。恐らくは小諸ルートの場合は宿泊施設における宿帳などで管理可能なであろうが、沓掛ルートでは名簿を作成するしか管理体制を敷くことができなかつたのであろう。物理学者であ

り随筆家でもある寺田寅彦が昭和8(1933)年に書いた「浅間山麓より」<sup>(36)</sup>では、浅間山周辺の鬼押し出しへの紀行文が書かれている。それによると「峰の茶屋には白黒だんだらの棒を横たえた踏切のような関門がある。ここで関守の男が来て「通行税」を一円とって還り路の切符を渡す」と書かれており、大正期のように名簿を置いて管理するだけではなく、昭和に入ると関所のようなものを設けて管理していたことがわかる。また、峰の茶屋からの登山口には、「上り口の立て札には頂上まで五時間を要し途中一滴の水もないと書いてある」と書かれているように、昭和になっても登山に際し注意点を立て札として掲載している。

またもう一つの特徴として、登山客への必要な携帯荷物や食糧などを挙げているとともに、浅間山の噴火状況などを油断なく観察するように促している点である。そしてさらには浅間山火口付近における投身自殺の禁止をうたっている点も挙げられよう。寺田寅彦は『柿の種』<sup>(37)</sup>の昭和8年10月の記述の中で浅間観測所について「切符売りの婦人こそは浅間火口に投身しようとしたのを、峰の茶屋の主人が助けて思い止まらせ、そうして臨時の切符係に採用したのだということであった」とし、同文章の中でも「浅間の火口に投身した人の数は今年の夏も相当にあった」と述べている。このことから当時、浅間山への登山客というだけでなく、自殺者の数も多く、そのために目を光らせていたと考えられる。



ASAMAYAMAFUNGAKO 登光ノ口大噴山間淺 (山間淺)

図2 絵はがき「浅間山噴火口ノ光景」



ASAMATOZAN 視賞ノ山登山間淺 (山間淺)

図3 絵はがき「浅間山登山ノ実況」

## 6. 近代における浅間山イメージ

前章のように、浅間山近辺への鉄道の敷設により登山客が増えていった。これによって地域社会側としても登山の案内人を用意し、さらには登山客への管理体制が敷かれ始めるといった対応が行われていった。このような双方向的な関係が次第に成熟し、浅間山に対するイメージを構築していったといえる。本章では、そのイメージを分析していく。

観光地としてのゲスト-ホスト関係を構築していった浅間山に関して、明治後期から大量の絵はがきが作成された。絵はがきの起源としては公的には明治33(1900)年の私製はがきの使用許可とされているが、実態としてはそれよりも遡ることができる<sup>(38)</sup>。起源の詳細はともかく、その前後から浅間山や信州の観光地の絵はがきは大量に作られていったと考えられる。

絵はがきの特徴としては近世に描かれた絵図などと違い、写真を使用したものが多い。したがって、画家が構図を意図的に変容させることはできず、極めて写実的なものになっている。これは近世のかわら版のように実際の距離や構

図を変化させて、無理やり江戸を組み込んで作成することが不可能になったことを指し示す。では、浅間山を描いた絵はがきはどのようなものがあつたのであろうか。

一番多く流布していたであろうと考えられるのが、信州一円の名所を取り上げた絵はがきである。『信州布引山名勝絵葉書』(探勝堂発行)では、「千曲川と浅間山」として浅間山が取り上げられているが、千曲川とセットになっているため、千曲川自体に焦点を当て浅間山は遠景となっている。同様に『追分宿名所絵葉書』(小諸宿吉沢写真館)では、「信濃追分駅より浅間山を望む」で追分駅を取り上げながら、遠景として浅間山を取り入れている。このように信州地方では浅間山は常に確固たる存在としてあり続け、そうであるがゆえに、遠景でも構図に組み込まれている。

これに対し、浅間山自体に焦点を当てた絵葉書も登場する。『奇々景観浅間山大噴火』(趣味の光沢写真)では、噴煙を上げる浅間山を取り上げている。噴煙を上げる浅間山を様々な角度

から捉えた絵はがきだけを収録しているのが特徴として指摘できる。これに対して『天下の奇観 浅間の噴煙』(趣味の光沢写真)では、浅間山の噴火に焦点を当てた絵はがきであるのは同じであるが、前者の違うのは登山客を描いているという点である。この登山客の描き方には二つの特徴が見られており、一つはステッキを持ち、シルクハットをかぶり、スーツ姿の男性が登山している様子である(図2)。これは既述のように軽井沢から外国人が登山を行っていたということからも、決して一概には事実とは違うと否定できない絵はがきである。しかし、実際には図3のように行李を背負うなどして登山したと考えるのが現実的であろう。既述のように随筆をみると御代田からの登山客などは草鞋をはき、行李を背負うといった様相で登山を行っていたわけである。

では、なぜスーツ姿の男性が描かれなければならなかったのか。この絵はがきの特徴として一番大きいのは男性の顔が黒く描かれており、個人性を塗りつぶされていることにある。図3などの行李を背負うといった一般的な日本人の登山客の様相とは違い、明らかに登山向きではない格好と携帯荷物(ステッキ)を考えると、この黒く塗りつぶされた男性は浅間山・軽井沢といった地域社会への表象イメージとして捉えることができる。軽井沢自体が外国人の多い場所というのは広まっていた印象のようで、前述の大町桂月の『関東の山水』でも軽井沢は外国人の町であることに紙幅が割かれ、また作家で

ある須藤鐘一の大正10(1921)年の紀行文『写真機を携へて』<sup>(39)</sup>では軽井沢について「軽井沢は外国人の避暑客が多く、従つて猥雑卑俗の気がないのでではやされてゐる」と感想を述べている。このように軽井沢に対するイメージは外国人の存在する場所として成立していた。したがって、前述の大町氏が記述していたように軽井沢の外国人が浅間山に夜間に登り始め、早朝の日の出を見るといった行動が事実として存在していても、浅間山に登る外国人、つまりは軽井沢にいる外国人としてのイメージは黒いスーツに、黒いシルクハット、そしてステッキという登山とは乖離した男性が描かれることになる。しかしながら、その男性は表象を汲み上げた男性であるがゆえに、個人性を排除し、顔を黒く塗りつぶす必要があったのである。

以上のように、浅間山に対するイメージは鉄道の発達、および周辺地域特に軽井沢の発展とともに大きく変容していった。江戸時代までの浅間山に関するかわら版などを考えると、軽井沢という地域および信州地方の名勝から浅間山を遠景に含めるといった絵はがきは構図・浅間山に対するイメージといった点で大きく変化している。特に浅間山の噴火そのものが観光コンテンツとなり絵はがき化し、売り出されるといったことは、絵はがきの売り手・買い手・そして絵はがきが送付された際の実受領者といった三者が共有できる浅間山像があったことを示唆する。そしてそれは浅間山周辺の軽井沢のイメージをも引き込んだものでもあった。

## 7. おわりに

本稿で述べてきたことをまずは概観する。

天明の浅間焼けに関しては、様々な記録類が残されている。その中でも事実を正確に把握しようという史料が数多くみられるわけだが、それ以外にも浅間山に対する当該期の人びとがどのようなイメージを抱いていたのかを探る必要がある。まず江戸の人びとにとって、浅間山が噴火したことそれ自体をすぐに把握することはできなかった。結果として庭先に降る火山灰や家の障子の揺れといったプライベートスペースの侵食によって、火山噴火が起こったことを理解する。その後、情報が流れてくることによって、浅間山が噴火したという事実は認識されていくが、その中で光りが流れたことや川に毒が流されているといった噂が飛び交ったことも事実である。しかし、それらの噂はどれも火山噴火そのものを捉えたというよりは、火山噴火によって起こった派生的な出来事にに基づいていることも留意すべきである。

ではそのような中、近世の人びとは火山噴火に対してどのようなイメージを持っていたのであろうか。見立番付をみていくと火山噴火は災害というカテゴリーで取り上げられてはおらず珍事として認識されていた。そのような中、多くの数が描かれ、流布した火山絵図、特にかわら版では、リアリティを保持するために正確かどうかは別として被害に関する数字を列挙し、かわら版の読者が数多く存在する「江戸」まで組み込んだ絵を描くといった特徴がみられた。

近代に入ってから、浅間山＝火山という認識は続いていた。しかしながら、東京と浅間山

周辺での事実認識には差異があったといえる。そのような中、東京から軽井沢・御代田まで鉄道が敷設されると浅間山への登山客が増加していくようになり、それを受けて浅間山周辺の宿泊施設では登山案内人を用意するなどの体制が組まれていった。その後、大正期に入り、登山者用に夏季限定の郵便局が設置され、また小諸や沓掛の宿泊施設や峰の茶屋を中心とした登山客の管理体制が敷かれていくことになる。浅間山に関するイメージは多く出回った絵はがきを分析すると信州地方の名勝に遠景として組み込まれる場合もあったが、浅間山噴火自体が観光コンテンツとして売り出されることになった。特に噴火を取り上げた絵はがきは、当該期の登山客を描いたものだけではなく、浅間山やそこへ登る軽井沢の外国人イメージから描かれたものも含まれている。

このように近世から近代という枠組みの中で、浅間山イメージを軸としてみてきた。特に近世においては天明の浅間焼けという大きな噴火があったことにより、火山絵図が大量に作成され、流布した。しかし、近代に入っても浅間山＝火山という認識は崩れることはなく、観光コンテンツとして利用されるまでになった。特に近世時のかわら版でも「江戸」を認識したものが作成されたが、近代に入っても、浅間山を訪れる人びとのまなざしを意識した絵はがきを作成されている。このように浅間山イメージをめぐっては、浅間山＝火山という根本的な点は崩れることなく認識されている。しかしながら、天明の浅間焼けや登山客の増加、地域社会



の変容といった様々な点の影響を受け、浅間山に対するイメージもまた変化しているといえる。

以上のようにみてきたが課題としては、近世に流布した様々な火山絵図の中で浅間山はどのように位置付けられるかということが挙げられる。富士山噴火や島原噴火といった他地域との

比較は重要な論点である。また、近代登山という枠組みの中で、浅間山をどのように捉えるべきかという点も指摘できる。特に明治期に入って日本山岳会などが設立される中で、浅間山に登山するということと日本アルプスとはどう違うのかといった点も考察すべきである。

## 註

- (1) 江戸遺跡研究会編『災害と江戸時代』(吉川弘文館、2009年)。
- (2) 北原糸子『近世災害情報論』(塙書房、2003年)。
- (3) 渡辺尚志『浅間山大噴火』(吉川弘文館、2003年)。
- (4) 大浦瑞代「災害の記録と記憶」(中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会『1783 天明浅間山噴火報告書』2006年)、同「天明浅間山噴火災害絵図の読解による泥流の流下特性-中之条盆地における泥流範囲復原から-」(『歴史地理学』50-2号、2008年)。
- (5) 前掲註3参照。
- (6) 萩原進編『浅間山天明噴火史料集成 二』(群馬県文化事業振興会、1986年)。
- (7) 神沢杜口「翁草」(『日本随筆大成第三期』19-24巻、1996年所収)。
- (8) 山東京伝「蜘蛛の糸巻」(『日本随筆大成第二期』7巻、1994年所収)。
- (9) 志賀紀豊「後見草附録」(『大日本地震史料』第2巻、1943年)。
- (10) 杉田玄白「後見草」(『燕石十種』第2巻、1979年)。
- (11) 加藤景範「浅間岳炎上記」(萩原進編『浅間山天明噴火史料集成 五』群馬県文化事業振興会、1995年)。
- (12) 橘南谿「北窓瑣談」(『日本随筆大成』第二期 第15巻)。
- (13) 山田桂翁「宝暦現来集」(『続日本随筆大成』別巻6)。
- (14) 浅間火山博物館所蔵。
- (15) 東京大学地震研究所所蔵。
- (16) 前掲註2。
- (17) 東京大学大学院情報学環所蔵。
- (18) 東京大学地震研究所所蔵。
- (19) 早稲田大学総合図書館所蔵。
- (20) 北原糸子『近世災害情報論』(塙書房、2003年)、大浦瑞代「災害の記録と記憶」(中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会『1783 天明浅間山噴火報告書』2006年)、福重旨乃・馬場章「浅間山火山絵図の類型について」(『民衆史研究会会報』64号、2007年)。
- (21) 前掲福重論文8ページ。
- (22) 東京大学地震研究所浅間火山観測所所蔵。
- (23) 東京大学情報学環図書室所蔵。
- (24) 東京大学地震研究所浅間火山観測所所蔵。
- (25) 近代登山に関しては安川茂雄『増補版近代日本登山史』(四季書館、1976年)や山崎安治『新稿日本登山史』(白水社、1986年)、藤原ゆり子「近代化と近代登山」(『日本山岳文化学会論集』2号、2004年)などの研究があるが、浅間山に関しては取り上げられていない。
- (26) 鹿島則孝『桜齋随筆』(本の友社、2002年)第44冊巻38。
- (27) 内務省地理局『官報抄覧』第5-7巻(内務省地理局、1888-1890年)。
- (28) 志村寛、前田次郎著『やま』(橘南堂、1907年)。志村寛は明治後年に日本アルプスに登るなどの登山者であると同時に植物学研究者でもあった。

- (29) 日本歴史地理研究会編『名蹟巡錫記』(弘文館、1902年)。
- (30) 拈華散人『山紫水明』(武田交盛館、1906年)。
- (31) 小島烏水『山水無尽蔵』(隆文館、1906年)。
- (32) 小島烏水『雲表』(左久良書房、1907年)。
- (33) 遅塚麗水『露分衣』(文禄堂、1907年)。
- (34) 大町桂月『関東の山水』(博文館、1908年)。
- (34) 佐久鉄道株式会社編『佐久鉄道案内』(佐久鉄道、1915年)。
- (36) 寺田寅彦『浅間山麓より』(『週刊朝日』昭和8(1933)年10月記載、後に『寺田寅彦全集』第4巻、岩波書店、1997年に所収)。
- (37) 寺田寅彦『柿の種』(岩波書店、1996年)。
- (38) 細馬宏通『絵はがきの時代』(青土社、2006年)。
- (39) 須藤鐘一『写真機を携へて』(三徳社、1921年)。

<謝辞>

本稿は人文地理学会2008年大会および国際シンポジウム「火山噴火罹災地の文化・自然環境復元—ソンマ・ヴェスヴィアーナ、指宿、ピナツボ、浅間 戦略的学融合研究 2008—」における発表をもとに執筆したものである。当日ご意見をいただいた方々にはこの場を借りてお礼申し上げる。なお、本稿は文部科学省科学研究費補助金特定領域研究(16089203)「火山噴火罹災地の文化・自然環境復元」の一環として行われたものである。



玉井 建也 (たまい たつや)

1979年生まれ。

[専攻領域] 日本近世史・コンテンツ学。

[著書・論文] 「近世琉球使節通航と海域をめぐる情報—伊予国津和地島を事例として—」(『日本歴史』727号、2008年)

「琉球使節派遣準備と解体過程—「最後」の琉球使節を通じて—」(『交通史研究』67号、2008年)

「『聖地』へと至る尾道というフィールド—歌枕から『かみちゅ!』へ—」(『コンテンツ文化史研究』創刊号、2009年)

[所属]

東京大学大学院情報学環特任研究員

[所属学会]

日本歴史学会、地方史研究協議会、日本デジタルゲーム学会、コンテンツ文化史学会など。



馬場 章 (ばば あきら)

1958年生まれ。

[専攻領域] コンテンツ創造科学・歴史情報論・デジタルアーカイブ学・社会経済史

[著書・論文] 「金工後藤家による御家彫の実証的研究」(2001年度-2002年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書、2003年)

「上野彦馬歴史写真集成」(渡辺出版、2006年)

「MMORPGを用いた歴史授業の教育効果について—工業高等専門学校における実験の結果報告—」(『デジタルゲーム学研究』第3巻第1号、2009年、鎌倉哲氏、富安晋介氏と共著)

[所属] 東京大学大学院情報学環教授

[所属学会]

日本デジタルゲーム学会、日本シミュレーション&ゲーミング学会、日本古文書学会、地方史研究協議会、日本アーカイブズ学会など。